

親子で集まれ自然塾の夏

《昆虫をさがして標本をつくろう》実施報告

生3環・ピオトープグループ 坪井 幸子

夏休みも終了間近い8月28日(土)、昨年同様、兵庫県立人と自然の博物館の大谷 剛先生を迎えてしあわせの村研修館とピオトープを中心に標記の自然あそび塾が開かれました。

ことしはベトナムの3家族も含め、予定数を大きく上回る30家族(子供59人,大人36人)が、手に手に虫かご・捕虫網を持参して大会議室も超満員の参加者にスタッフも20余名で対応しました。

最近の風潮として昆虫採集を非難し「虫を殺す標本づくりはもってのほか」という声が聞かれますが、子供時代に自然に接し、昆虫を識ることで生物の命の貴さも学べる「昆虫採集・標本作り」にするため大谷先生のお話を聞き「必要以上に採らない」と、6班に分かれて採集コースに出かけました。

暑すぎた夏はチョウの成長に悪く、極端に数が少ない年でしたが、この日さらに台風の余波で風が出て大型のアゲハチョウなどほとんど姿を見せません。それでも草原に多いバッタ類、水辺に多いトンボ類、樹木に多い甲虫などに歓声を上げて協力し合う親子連れ、誘導するスタッフで賑わいました。

実は前々日から昆虫集めの餌付けを施しておきましたが、魚肉・ミンチ肉を入れたトラップは猫

に荒らされていたし、いちぢく・バナナを酒や黒砂糖で練った釣り餌は風で乾き過ぎたり、効果がなさそうでしたが、1時間ほど駆け回って満足のいく昆虫採集ができたようでした。

またこの日の特別イベントで、ピオトープ内に落ち葉ンクと称する堆肥作りコーナーがありますが、この中で昆虫の幼虫が育ち、ゴミムシなどの昆虫が住んでいるところを子供達に見せる予定でした。

スタッフが大きなブルーシートを敷いて、朽ち木混じりの堆肥をスコップで掘り出し始めると子供達も眼を輝かせて、余り見られない昆虫や幼虫を取り出しては、先生やスタッフに名前を聞いたりする内にカブトムシの3齢の幼虫と教えられると、家に持ち帰って飼育したいと親子で飼育方法をたづねるなど、想像以上の反響がありました。

せせらぎ付近の緑陰でお弁当をすませて研修館に戻った皆は、室内に展示された多くの昆虫の標本にくぎづけになりました。この立派な標本箱は、ピオトープグループの松本さんが25年前に作成された標本の一部ということで、現在、希少昆虫と報じられる昆虫にもお目にかかることができました。

先生も、捕まえた昆虫を苦しませて死なせて捨ててしまうより、感謝の

気持ちで標本に仕上げても自分の宝にしなさい、ということで標本作りが始まりました。

説明どおり親子で取り組める父親もいましたが、母親の場合は子供もギブアップしてしまい、手伝うスタッフも慣れない標本作りを体験しました。標本が完成した子供達から順番に昆虫名の確認が始まり、手元の図鑑になればスタッフにたずね、さらに先生へたずねた結果、この日の標本に仕上げられた昆虫の種類は約60種類にもなったということがわかりま

した。

ことしの自然塾は(外国人の親子も参加し日本の自然を知る)ですが、3家族の子供達は日本育ちか皆と一日を楽しんでいましたが、母親達にベトナムの昆虫事情とか感想を聞けばよかったと思いました。

ピオトープグループとしての自然塾参加は4回目。年々盛会となって、ことしは里山グループにご協力いただきましたが、わの皆さんにもピオトープ活動に参加いただけたらと願っております。

別刷り入ってます

KSCうたごえ大祭典、太陽光発電、会員相互扶助についての詳しい説明とお願いもお見逃しなきよう。

編集後記

阪神淡路大震災からやがて10年を迎えようとするとき起こった新潟中越地震の惨状は水害とのダブルパンチで、現地の方の気持ちを思うと堪らない。NHKの教育チャンネルとFMラジオが「xxさんからxxさんへ、心配してます。連絡ください」というメッセージを延々と流した。疑問が二つ、三つ。

自分の名前がいつ出るかわからないこの放送をずっと見続けるだけの余裕が被災地の人にあるのだろうか。

「連絡ください」と呼び掛けている人は被災した人に(連絡という)オネダリをしているという

自覚を持たないのだろうか。「被災地の人、私の心配を取り除いて」とも聞こえて仕方がなかった。心配なら行けよ。

呼び掛ける方も掛けられる方も他府県なのになぜ神戸のローカル局にも流すのだろうか。もしやNHKのパフォーマンス?

わのホームページの各部・地区別活動記録を見ると情ぎゃらに掲載しているのは実際に行われている活動のほんの一部でしかないことが分り、無力感に襲われる。活動は毎日なのに情ぎゃらの発行は3ヶ月なのが疎になる一因でもある。どうか皆さまの投稿で編集子のシリを引っ叩いて頂きたい。(サン)